

浮世絵の華

平成
元年4月20日(木)～5月7日(日)

うた
た
ま
も
ろ



寛政三美人(富本豊雛、難波屋おきた、高島屋おひさ)

刈谷市美術館

開館時間 / AM 9:00 ～ PM 4:30 (4月20日(木)は午前10時開館)

月曜休館 / 4月24日・5月1日

主催 / 刈谷市・刈谷市教育委員会・中日新聞社

後援 / 愛知県教育委員会 協力 / 日本浮世絵博物館

※駐車場に限りがありますので、JR東海・名鉄電車(刈谷駅南口下車徒歩7分)をご利用ください。

入館料

一般 500円 (400円)

高大生 400円 (300円)

小中生 300円 (200円)

()は20人以上の団体料金です。

うたまろ

日本浮世絵博物館コレクション

浮世絵は、19世紀以来、欧米の近代芸術全般に大きな影響を与えてきました。その浮世絵を代表し、世界的な巨匠として評価される画家、それが浮世絵師・歌麿です。大首絵をはじめとする名品の数々は、女性の真の美しさをとらえ、「美人画の極致」とまで言われています。

本展は浮世絵の蒐集、研究に関して、愛好家に限らず、専門家にも世界的に評価の高い日本浮世絵博物館のコレクションから厳選された第一級の名品70余点を紹介するものです。

浮世絵300年の長い歴史は、歌麿の出現により、その頂点に達しました。その作品の数多くが、浮世絵を代表する名品になっています。

歌麿の本姓は、北川(後に喜多川と名乗る)、幼名は市太郎(といわれているが未確認)、後に勇助と称し、さらに勇記と改めた。少年時代に母とともに江戸に来(と思われる)て、鳥山石燕に師事しました。本姓の北川を画姓として、「北川豊章」と名乗り、北尾重政、鳥居清長などの美人画家から影響を受けました。天明元年(1781)、「うたまろ」と改めて独自の画風を確立しました。その当時、第一級の知識人である四方赤良を始めとする狂歌の四方連(よもれん)の人々や有力な版元である葛屋重三郎らと交誼を結んでいます。

その教養と自負が、最もよく表れているのは、寛政3(1791)年に発表された美人画の半身絵や大首絵作品です。雲母摺と呼ばれる作品群は、まさに歌麿の絶品で、浮世絵芸術の頂点といっても過言ではありません。それまでの女性の全身図から、半身、さらにクローズアップして顔へと、微に入り細をうがう描写力を駆使しています。「観相歌麿」とあるように、いわば女性の表面的な美しさから、より深い内画的な美しさ、そしてスナップ写真ともいえる何気ない日常生活の一瞬の美しさを描いています。歌麿の絵を見ていると、繊細な描線がリズムを作り、優雅で気品のある色彩が快い旋律を奏でているように思います。情感豊かで、教養に裏うちされた気品、意気、洒脱さを具現した画家、それが歌麿です。

文化元(1804)年、幕府の忌諱(きぎ)に触れ入牢3日、手鎖50日の刑を受け、その二年後に、54歳*で歿しました。浅草(現在は鳥山)専光寺に葬られ、法名は「秋圓了教信士」と記されています。

合 掌

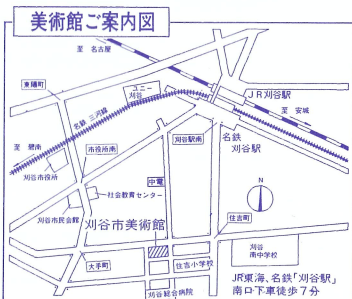
*只誠シセイ編『名人忌辰録』の享年(典拠未確認)に拠る。但し、『名人忌辰録』の歿年、忌日(文化二年五月三日、歳五十三)は『専光寺過去帳』記述(文化三年九月二十日、享年不明)と異なる。



青楼七小町／鶴屋内・篠原



扇屋内・蓬萊仙(みやびと)



刈谷市美術館

刈谷市住吉町4丁目5番地 Tel(0566)23-1636



松葉屋瀬川(あやめ)

流行模様歌麿形／小紫・権八